

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：84413

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01120

研究課題名（和文）大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究

研究課題名（英文）Research of Water control remains and Urbanization from the 5th to the 17th century in central Osaka

研究代表者

南 秀雄（Minami, Hideo）

一般財団法人大阪市文化財協会・学芸部門・次長

研究者番号：70344380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：大阪市内の発掘調査の成果と、近年、急速に進展してきた古地形復元を基に、考古学・地質学・河川工学の協働によって、都市形成の核であった大阪中心部の5～17世紀の治水・水防の実態に迫った。また、治水建造物と都市の造成や拡張との関係も考究した。主な対象は次の4点である。5世紀の難波堀江（なにわのほりえ）、延暦4（785）年の三国川（神崎川）開削と河内川付け替え、中世の沿海部（難波砂堆）の開発と水防・水利（灌漑）、淀川下流（大川・中津川・神崎川）の流路固定の過程と豊臣期城下町の治水システム。

本研究によって、多くの記録が残る江戸幕府の流域治水や河村瑞賢の治水事業までをつなぐことが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず『日本書紀』に登場する難波堀江に関する通説の誤りを指摘し、最新の古地形復元に基づく新たな難波堀江像を提起した。また研究が停滞・不足していた三国川開削や淀川下流の流路固定の過程、豊臣期の治水システムの解明などに対して既存の発掘調査の成果がおおいに活用できることを示した。まったく顧みられることがなかった中世以前の大阪の沿海開発の実態にも発掘データを基に接近できることを示せた。

これらは大阪の治水の歴史の空白を埋めるもので、文献史などの関連分野への波及効果がある。また本研究の調査研究法は、地域や国を問わず類似の自然環境下にある場所で汎用可能であり、この点の波及効果も期待できる。

研究成果の概要（英文）： We have examined the realities of water-control remains from the 5th to the 17th century in central Osaka which is the core of urbanization, by interdisciplinary research of archaeology, geology and river engineering, based on excavation surveys and the latest reconstruction of the paleo-terrain. Furthermore, we studied the relationship between water control structures and urban development and expansion. The main research subjects are the following four points.

1, The Naniwa Canal (Naniwa-no-Horie) in the 5th century. 2, "The Mikuni River (former name of the Kanzaki River) Excavation Project" of the 4th year Enryaku (785) and the replacement of the Kawachi River, the former name of the Yamato River. 3, The coastal development and irrigation at the Namba Sandbar of medieval Osaka. 4, The process of flow fixation in the lower Yodo River (the Okawa River, the Nakatsu River and the Kanzaki River) and the flood control system of the Toyotomi period castle town.

研究分野：考古学

キーワード：治水 水防 大阪 都市 発掘 淀川 古地形 大和川

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

淀川・大和川河口の海岸低地にある大阪では治水なくして都市の形成・拡大はあり得なかった。大阪の治水に関する記録は江戸時代以降、数多く残っており、17世紀後葉には有名な河村瑞賢による治水事業があった。しかし、17世紀前葉(豊臣期)以前の記録は非常に少なく、都市への胎動が始まった5世紀からその間の治水・水防の実態はほとんどわかっていなかった。

一方、大阪市内では低地帯での発掘調査が増加し、堤防などの治水関係の遺構も発掘されている。また、多数の発掘調査やボーリングデータを駆使した詳細な古地形復元が急速に進展していた。これらの成果を活用すれば、空白期である5世紀～17世紀前葉の大阪の治水・水防の実態の解明に対し、新たな成果が得られることが予測できた。

### 2. 研究の目的

大阪市内の発掘調査の成果と、近年、急速に進展した古地形復元を基に、考古学・地質学・河川工学の協働によって、都市形成の核であった大阪中心部の5～17世紀の治水・水防の実態の解明を旨とした。堤防などの治水・水防遺構は後の都市の形態や造成に影響を与えており、それらとの関係も究明した。

### 3. 研究の方法

(1) 大阪の治水の要となるような以下の4つの主題を対象に、おおむね へ順次、研究をすすめた。

5世紀の難波堀江(なにわのほりえ)

延暦4(785)年の三国川(神崎川)開削と同8年の河内川(大和川)の付け替え

中世の沿海部(淀川三角州と難波砂堆)の開発と水防・水利(灌漑)

淀川下流(大川・中津川・神崎川)の流路固定の過程と豊臣期城下町の治水方法

(2) 良好な発掘地点の資料の年代測定・珪藻分析などにより、研究の基盤となる古地形復元を修整し、その精度を上げることに努めた。

(3) 大阪周辺をはじめとする全国で発掘された治水・水防遺構を集成し、先行研究に学ぶとともに、類似の自然環境下の他地域の事例と比較対照した。

(4) 考古学・地質学・河川工学を専門とする計10名で研究チーム(南、趙哲済(地質学)、杉本厚典(考古学)、小山田宏一(考古学)、櫻田小百合(考古学)、大庭重信(考古学)、角哲也(河川工学)、中条武司(地質学)、小倉徹也(地質学)、田中裕子(考古学))を組織し、多角点・学際的な視点から研究会・巡検などを定期的で開催して研究をすすめた。不足の分野などは研究者を招聘した。

### 4. 研究成果

#### (1) 難波堀江

『日本書紀』仁徳期に登場する難波堀江(位置は淀川下流の現大川に比定)は、排水路とともに大阪湾と淀川・大和川をむすぶ運河として機能し、難波津とあわせて大阪の都市形成の原動力となった。難波堀江は、幅広い海岸砂州を掘り抜いた大土木工事というのが、これまでの一般的な理解である。しかし、新しい古地形復元によれば淀川の三角州の発達は従来の考えよりずっと早く、北西から伸びた三角州が上町台地との間の水域をしだいに狭め、古墳時代中期にはすでに現在の大川と近い流路が存在していたことがわかった。つまり、砂州を長距離に掘り抜いた大土木工事という考えは想像の産物で、通説は大きな見直しが必要である。

新たに復元された地形では、流域面積が圧倒的に広い淀川側の流れが、増水時に大和川側の流れを妨げ、上町台地の北～北東の地点でバックウォーター現象を起こすというのが小山田宏一・趙哲済らの推定である(図1)。ここでは大和川側・河内湖から大阪湾への排水が滞り、泥が溜ったと考えられる(淤塞部)。また中条武司は、現大川と類似する流路が大阪湾と河内湖をつなぐ所にあったとすると、ここが潮の出入りするチャンネルとなり、干潮時と満潮時の砂の移動によって河内湖側(河水の入口)と大阪湾側(河水の出口)に潮汐デルタ(Tidal delta)などの堆積体が形成されたと推定した。河内湖側の潮汐デルタの場所は流量の不均衡から生じる淤塞部の場所と重なり、さらに排水を妨げる。以上が洪水の真の主要因であったと考えられる。



図1 5世紀頃の古地形と洪水の主因

『日本書紀』に「北の郊原を掘り、南の水を引きて西の海に入る」と記された、掘ったのは大和川側が淀川に合流する直前の淤塞部周辺と考えられる。砂州を横断掘削した場合、「北の水」（淀川）と「南の水」（大和川）の合流後となり、書紀がわざわざ「南の水（大和川）を引きて」としたことと合わなくなる。新たな古地形復元をもとにした推定は書紀の記述をより良く説明している。

小山田や角哲也は、江戸～明治時代の九頭竜川・三国湊でみられる水制などを例示し、大阪周辺の古墳時代前後の発掘例から、難波堀江においても疎通能力を向上させる水制工と護岸工などが使用されていた可能性を指摘している。また当時、船は人力で曳いて川を遡上させることがしばしばあった。難波堀江に比定される現大川の南側の発掘から、難波堀江の南岸は、船を曳くための道（棧道）や着岸のため、高低差を少なく直線的になるように整えられたと考えられる。

## (2) 三国川開削

『続日本紀』延暦4年、「摂津国の神下、梓江、鯨生野を掘りて三国川（神崎川）へ通ず」とある三国川開削路の場所は、右岸が摂津市の一津屋～別府、左岸が大阪市の江口～井高野である。明治11（1878）年に現在の新河道ができて廃川になるまで機能し、現在も明瞭に堤跡が残る。

三国川開削については、淀川の排水を可能・良好にするための分水工事（治水重視）と、淀川（大川）下流にある難波津の浅瀬化による機能低下を避け、淀川と神崎川を連結させて長岡京と瀬戸内海を直接結びつけるため（交通路重視）という二つの考えがある。開削ルートについては、淀川から大きく屈曲して分岐した姿が淀川の蛇行路の利用か、吹田砂州が障壁となった大規模な掘削路かという見解の相違がある。これに対し、発掘調査で判明した各地点の流向などを活かした吹田砂州周辺の古地形復元、自然地理学による最新の淀川流路の復元、絵図類、番田水路などの排水網（井路・いじ）などからみた河流の遡及的復元、下流の難波堀江をはじめとした淀川・大和川全体の治水系のなかでの目的・効果の考察、以上の3点から実態に迫った。

その結論は以下のとおりである。

三国川開削は自然の河川の蛇行を利用したと推定され、中近世の排水路や河川整備からすると、淀川右岸の水が収斂するところとも重なっていた。これ自体は、自然の河川環境に適合した無理のない計画であった。吹田砂州の障壁としての働きは然程でもなかったと考えられる。また近世の絵図・史料から開削路そのものの構造が類推でき、どの時代にも淀川側から神崎川側への一定の分水があったと推測される。三国川開削の主目的は、下流の大和川側との合流部でのバックウォーター現象を減衰し、流域面積の広い淀川の水をいくらかでも他に逃がすことにあると推定された。3年後に着手された和気清麻呂の河内川付け替え（未完）も、合流部の手前で大和川水系の水を逃がす、一連の意図を有した計画であったと考えられる。三国川開削は治水を目的としており、淀川と神崎川を連結させて京都方面と瀬戸内海を直接結びつける水上交通路となったことは、副次的な結果であろう。

## (3) 中世の沿海開発

内海の沿海低地が多くを占める大阪では、淀川などの三角州と上町台地沿いの難波砂堆の開発が以降の都市の拡大の鍵となった。江戸時代には広大な干拓地（新田）が開発され近代には工業地帯に転換した。だが、新田に接続する地域までの中世以前の開発の過程はほとんどわかっていなかった。沿海低地では、川の洪水のみならず、暴浪・高潮などの海からの脅威に備える必要があり、耕地開発には潮汐への対応も必須であった。旧難波村・木津村周辺の難波砂堆を対象に、発掘調査と古地形復元の成果を基に、地図・絵図類による歴史地理学的手法などを組み合わせ、中世の沿海開発の過程とそこで使用された水防・灌漑の技術について明らかにした。

旧難波村・木津村周辺の難波砂堆では約60件の発掘調査があり、個々の地点で陸化した地層と最古の作土層（その地点での最初の耕地開発）が押さえられる。これをプロットすると古地形復元と整合し、難波村・木津村の集落のすぐ西の南北ライン（図2のA-I）を境に、この東（陸側）は12～13世紀までに一帯が耕地化されている。一方、この西では耕地化はおおむね近世まで下るが、海側に飛び出して耕地化が中世まで遡る地域がある（図2の）。明治23年5千分の1地図では、ここを囲んで堤の痕跡が見て取れ、「堤添」の小字が残る。この地域は、稀に潮をかぶることもある、いわゆる「塩入の荒野」を堤で囲んで開墾した「築堤開田」で開発されたと考えられる。干拓の前段階の中世以前の沿海開発の方法である。

上記のような発掘地点の作土層の時期と明治期の地図に残る区画のまとめから、17世紀の新田開発までの耕地化の順と時期を推定することができる。12～13世紀までに一帯の耕地化が完了するA-Iのラインの西の開発の順は、図2のとなる。最近、蝮川より南のの地域の西端で15世紀半ば以前の柿経が出土した大きな

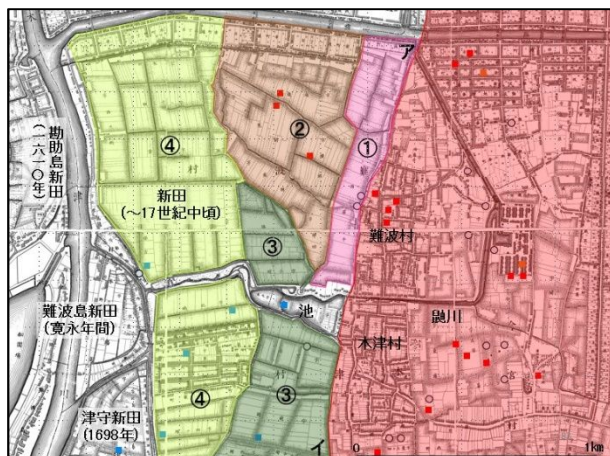


図2 旧難波村・木津村周辺の沿海開発の順と時期

排水路が発掘され、の開発も中世にさかのぼる可能性が高くなった。の西に走る区画線(北北東-南南西)は、を囲んだと同様の堤となり、ここも築堤開田の手法で開墾した可能性がある。は17世紀中葉以前とされる絵図に「新田」と記されたものがあり、開発は遅れる。

難波砂堆では、近世になって埴樋(いりひ)で直接、木津川(淀川下流)から取水するまで、灌漑用水の主な水源は上町台地からの小河川(融川など)であった。旧難波村・木津村・今宮村で発掘されている中世の溝は、明治時代の地籍図に残る用水路網と方向が一致しており、融川から枝分かれしてどの一筆までも到達する水路網が中世にできていたと推測される。しかし、難波砂堆は地下水位は高いが砂質で水持ちが悪い。水量に乏しい水路灌漑を補うための水溜状の大型土壌(水掻き池)が多数、発掘されており、18世紀には灌漑用の大型井戸が取って代わる。また、上町台地の大きめの開析谷などには河底池などの溜池が築かれた。これらは、難波砂堆やその海側の耕地開発による水不足を補うために整備されたと推定される。

もうひとつ沿海低地の耕地化で重要な施設に、河口や水路末端の池がある。この池は潮汐に対する調整と貯水の役割を果す。池へつながる用水などには樋門が設けられ、満ち潮になれば閉ざし、引き潮では開く。こうしないと潮が灌漑水路や感潮河川を遡り、塩害をもたらす。各地で樋門の開閉が自動化されるまで樋守(といもり)がおかれ、樋守の存在は中世まで遡る。旧難波・木津村周辺では一帯の灌漑を担った融川の河口にこの調整池が設けられた。池は中島を有し、東西約400m、南北約200mとそうとうな規模があった。19世紀初めの絵図には、5個の樋門に対応し堰で細かく仕切って水位調整された池の完成形が描かれている。同種の調整池は、大川と中津川に挟まれた南中島地域の井路網の末端にも数個が描かれている。これらの調整池は中世までの灌漑水利システムの末端に位置し、それより海側は干拓地となって淀川から直接、用水を引く新たな水利システムが始まる。つまり、水利システムが切れるところに調整池が残り、それが中世以前の開発と近世以降の開発の界線付近になっていたと大阪沿海部では捉えることができる。典型的な淀川の三角州帯である南中島地域については、共同研究メンバーの櫻田小百合が、中近世の沿海開発の過程と灌漑・水防の技術を解明した好論文を発表している[櫻田2023]。

難波砂堆でみられる沿海開発の過程やそこでの開墾・水利の技術、陸側の溜池との関係などは、類似の地形環境にある姫路市大津地区福井荘の砂堆周辺の耕地化や福井大池との関係などによく対比できる。近代以降の都市化でかき消されたかに見えるが、じつは大阪の中心部には、内海の沿海低地の開発の典型例がよく残っているのである。

#### (4) 淀川下流の流路固定と豊臣期城下町の治水システム

別所秀高などの最新の淀川流路の復元によれば、摂津市一津屋より下流は地形区分上の「三角州」に当り網状流路が発達した。それと呼応するように大阪市内の発掘調査では、時期がよくわからない多数の自然流路が見つかっている。また、趙哲濟・中条武司による中津川の古代以前の旧流路の復元では、江戸期以降の河道とは大きく異なる姿が示されている。大川・中津川・神崎川から成る淀川下流は、ある段階からしだいに流路が整理され固定していき、17世紀の国絵図に描かれているような明治時代と同様の場所を流れるようになったと考えられる。しかし、流路固定の過程はよくわかっておらず、本格的な研究もない。淀川下流には井路と呼ばれる排水兼灌漑路が張り巡らされ水田開発がすすんだが、網状のまま流路が変転すれば灌漑網の維持もままならない。

趙・中条らの推定流路の該当位置での発掘調査、江戸期～明治以降の河道のすぐ際(堤内・堤外)での自然堤防や堤防遺構の発掘、神崎川右岸の「三国堤」などの荘園図資料あるいは牧から田畠への転換時期、これらを手がかりにしてある程度、流路固定の過程とその時期を絞り込むことができる。

それによれば、大川は5世紀、神崎川は9世紀、中津川はそれよりやや遅れて流路の整理・固定化へ動き出し、12～13世紀には三川とも江戸期河道へつながる姿にまとまっていったと推定できる。大川における難波堀江も神崎川における三国川開削も当初は洪水対策が目的であったが、後の流路の固定化は舟運路の確保という利水の面も大きかった。中津川の場合、水田開発と農業用水の確保のために流路の固定化が図られた面が大きいと考えられる。流路の整理後に残った旧河道の方は、幹線の灌漑・排水路に活用された。今のところ、遺構・史料から確認できる15世紀の連続堤は、神崎川の水衝部に当り、大寺社などが早くから庄園を開発した榎坂(吹田市)周辺のみである。淀川下流域の中世以前では、自然堤防の保全・増補によって洪水の備えとした場所が多かったと考えられる。この治水方法に大きな変化がみられるのは16世紀代である。

大阪中心部では、城下町を貫通して流れる大川(淀川本流)の周辺で、堤防跡などの豊臣期の治水遺構が発掘されている(図3)。

まず、淀川本流と神崎川、中津川で分水量が調整された後、大川が城下町に入る最初の地点に設けられたのが天満城下町の北東～東の堤防である(図3の)。3ヶ所で発掘されており、基底幅20～25m、高さ3m以上の大規模な土築堤である。この堤の外には舟運の便のために石垣を伴う2区画の屋敷が造成されたが、この屋敷は大川の水を城下町と反対側へ逸らす水制の役割も果たしたと考えられる(図3の)。もっとも水当りの強い屋敷の角部などに未使用の巨大な石垣石が集められていたことも、この証拠となる。天満城下町の堤防と堤外屋敷は、一体となって「水刎ね」となっていたと捉えることができる。

天満城下町から逸らされた水が向かう対岸では、網島大堤が発掘されている(図3の)。大堤というごとく、この堤防跡は基底幅で天満の堤防の1.5～2倍でいと推定される。高さは約



図3 豊臣期大坂城下町の大川(旧淀川本流)の治水システム

3.5mで、堤防の天端の標高は天満のそれより低く設定されており、非常の際は城下町と反対側(左岸側)に溢れさせたと考えられる。網島大堤の位置は、淀川水系と大和川・寝屋川水系の合流点に近い、大阪の治水の要となる所である。江戸時代に入ると網島大堤の場所を起点にして、嘴状に分水堤(背割堤)が伸びていった。

網島大堤で受けた後、河流は地盤の固い上町台地の北端に向かって流れ、上町台地にぶつかって西に大きく流れを変えた。上町台地北端の天満橋付近が大川の最大の水衝部となり(図3の )、この付近の台地斜面である大川左岸では、大坂本願寺期(1496~1580年)から

豊臣期(1580~1615年)、徳川初期(1615年~)、さらにそれを利用して近代に至るまで、繰り返し築かれた石垣護岸と土築護岸が発掘されている。治水の要となる水衝部として、地盤の固い上町台地に増水時の河流がぶつかるように導くやり方は、武田信玄の治水伝承が残る甲府盆地の釜無川と御勅使川の合流点で、「高岩」に河流がぶつかるように設計された方法と原理は同じである。

上町台地にぶつかって西に流れを変えた水は、下流の船場城下町の北東(図3の )や北(図3の )で発掘されている堤防に沿うようにして大阪湾へ向かった。以上のように、豊臣期の大川の治水は、建設直後の大坂城下町の中を如何に円滑に河流を通過させるかに要点があった。そのためにポイントとなる場所に適切な治水施設が設けられ、リレー方式で連関していた。さらに下流側において淀川などの排水に本格的に取り組むのが、約100年後の河村瑞賢による九条島の開削や堂島川改修などの治水事業である。

また、豊臣期の大規模堤防等の治水建造物は城下町の造成とも関係し、以降の町の形態などに影響を与えている。その一つは、町の嵩上げと堤防の幅の拡大が連動していることである(図4参照、図3の地点など)。これは現代のスーパー堤防のようなもので、町の強靱化に役立ったであろう。また、豊臣期の堤防や堤外の屋敷地は、川側へ町が拡張していく起点として利用された(図3の地点など)。とくに地点では、詳細な発掘調査により、堤防が造成のための作業道に転用され、周囲の建物が埋め殺されて嵩上げされた過程がよくわかっている。

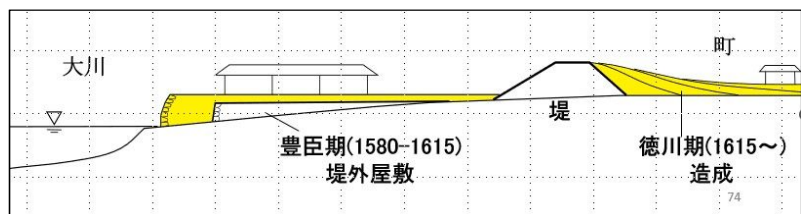


図4 堤防・堤外屋敷と町の造成・拡張の関係

以上の成果は報告書(参考文献、156頁、500部刊行)にまとめ、全国約400ヶ所の大学・図書館などへ送付した。報告書には、趙哲済(研究分担者)たちによる古地形復元の修整やその根拠となった基礎データ、杉本厚典(研究分担者)による発掘された治水・水防遺構の集成も掲載している。また、2022年12月に大阪歴史博物館にて、研究成果の一部を一般市民・研究者に公開する講演会を開催した(参加:102名)。さらに2023年5月には、大韓民国慶北大学校にて成果の概要を講演し(Brain Korea 21による招待講演)、発掘調査を基に地質学や河川工学などと協働した調査研究方法の、地域や国を跨いだ汎用性が評価された。

本研究により、文献記録がひじょうに少ない17世紀前葉以前の大坂の治水の空白期をある程度埋めることできた。21世紀の気候変動による洪水や高潮などは、近代の土木技術のみで対応できるものではない。前近代の治水・水防や、河道・海岸の変化への関心は、住民に対し地域の防災や土地の来歴を考えてもらう契機になる。本研究のような視座や方法論は、将来の都市計画にも裨益する有効性・発展性を有していると考えられる。

<引用文献>

南秀雄・趙哲済・杉本厚典・小山田宏一・大庭重信・中条武司・角哲也・別所秀高『大阪中心部における5~17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究』、(一財)大阪市文化財協会、2023年

櫻田小百合「淀川河口低地の水防・水利と耕地開発 - 中・近世の南中島地域 - 」『大阪市文化財協会研究紀要』24号、2023年、pp.1-32

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 南秀雄	4. 巻 0
2. 論文標題 淀川下流の流路固定と豊臣期城下町の治水システム	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南秀雄・趙哲済・杉本厚典他『大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究』	6. 最初と最後の頁 81-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙哲済	4. 巻 0
2. 論文標題 西大阪平野における遺跡の地層対比、巻頭図版・解説	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南秀雄・趙哲済・杉本厚典他『大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究』	6. 最初と最後の頁 105-120, 巻頭図版1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本厚典	4. 巻 0
2. 論文標題 発掘された堤防遺構～先史・古代編	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南秀雄・趙哲済・杉本厚典他『大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究』	6. 最初と最後の頁 141 - 156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本厚典	4. 巻 21
2. 論文標題 江戸時代から明治時代にかけての大阪の菓子店の立地変遷について - 産業マップの検討を通じて -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪歴史博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻田小百合	4. 巻 24
2. 論文標題 淀川河口低地の水防・水利と耕地開発 - 中・近世の南中島地域 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪市文化財協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南秀雄	4. 巻 23号
2. 論文標題 発掘からみた中世大阪の沿海開発 - 難波砂堆	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪市文化財協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙哲済・南秀雄・大庭重信・中条武司・別所秀高	4. 巻 23号
2. 論文標題 大阪地域の河内低地西部と天満砂州における縄文時代早期以降の年代・岩相層序対比 - 14C年代と地盤沈下の補正に基づいて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪市文化財協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 53-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙 哲済・藤藪勝則・菊井佳弥	4. 巻 75
2. 論文標題 和歌山平野の海岸砂丘を巡る, 眺める	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地球科学	6. 最初と最後の頁 173-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15080/agcjchikyukagaku.75.2_173	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆春・別所孝範・趙哲済・小滝篤夫	4. 巻 75
2. 論文標題 特別企画 紀伊半島西部の地質概要と巡検案内	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地球科学	6. 最初と最後の頁 135-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15080/agcjchikyukagaku.75.2_135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 南秀雄	4. 巻 22号
2. 論文標題 延暦四年の三国川・淀川治水事業の研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪市文化財協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南秀雄	4. 巻 72巻4号
2. 論文標題 書評「中尾芳治編『難波宮と古代都城』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 135-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙哲済・福島正和	4. 巻 40号
2. 論文標題 宮古市田鎖車堂前遺跡の12世紀の居館を巡る堀の構築と埋没の過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要	6. 最初と最後の頁 43-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 竹下欣宏・花岡邦明・趙哲済ほか5名	4. 巻 29号
2. 論文標題 仲町丘陵発掘2019の地質学的成果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野尻湖ナウマンソウ博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南秀雄、小山田宏一、趙哲済、杉本厚典、中条武司、角哲也	4. 巻 21号
2. 論文標題 難波堀江の学際的再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪市文化財協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本裕也、趙哲済、松元美由紀	4. 巻 21号
2. 論文標題 大阪市都島区網島町遺跡の古環境	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪市文化財協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 89-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙哲済、福島正和	4. 巻 岩手県財団報告書718集
2. 論文標題 3. 基本層序と遺構面	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡発掘調査報告書第2分冊 - 田鎖車堂前遺跡 本文・附編 -	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山田宏一	4. 巻 11
2. 論文標題 難波堀江の開削地点とその地形環境に適応した治水施設	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪府立狭山池博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本厚典	4. 巻 なし
2. 論文標題 古墳時代から奈良時代にかけての上町台地北部の金属器生産資料	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鑄造遺跡研究資料	6. 最初と最後の頁 未詳
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 南秀雄
2. 発表標題 大阪中心部の5～17世紀の治水遺構と都市形成過程
3. 学会等名 大韓民国慶北大学校考古人類学科 Brain Kore 21 招請講演 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 趙哲済
2. 発表標題 「キルサイトの状況証拠」の地層について
3. 学会等名 野尻湖発掘調査団 野尻湖シンポジウム2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 趙哲済
2. 発表標題 予測発掘 - ヒトの足跡化石発見の可能性 - 現生ヒトの足跡のタフォノミーから -
3. 学会等名 野尻湖発掘調査団 野尻湖発掘60周年記念シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 趙哲済
2. 発表標題 第23次野尻湖発掘にむけてのテーマ（私案）：「キルサイト」の地層をしばらくこみ、狩りと解体の証拠を探そう。
3. 学会等名 野尻湖発掘調査団 野尻湖シンポジウム2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 趙哲済・中条武司ほか10名
2. 発表標題 大阪の低地と台地の礫組成 - ミニ団研：遺跡の地層から採取した礫の検討会の結果から -
3. 学会等名 地学団体研究会大阪支部
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 南秀雄
2. 発表標題 淀川下流の流路固定と豊臣期城下町の治水システム
3. 学会等名 共同研究「大阪中心部における治水遺構と都市形成過程の研究」成果報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山田宏一
2. 発表標題 古代河内低地の治水と難波堀江
3. 学会等名 共同研究「大阪中心部における治水遺構と都市形成過程の研究」成果報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 斎藤秀樹
2. 発表標題 御勅使川・釜無川の治水・利水と集落形成・生業の変遷～武田信玄治水伝承の現在～
3. 学会等名 共同研究「大阪中心部における治水遺構と都市形成過程の研究」成果報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 南秀雄
2. 発表標題 延暦四年の三国川・淀川治水事業の研究
3. 学会等名 都城制研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南秀雄
2. 発表標題 難波堀江の学際的再検討など
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館共同研究「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」（代表：松木武彦）研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 趙哲済
2. 発表標題 大阪海岸低地の津守新田に干拓された古代に遡る干潟
3. 学会等名 日本堆積学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 趙哲済
2. 発表標題 大阪市都島区網島町で見つかった慶長伏見地震の痕跡
3. 学会等名 地学団体研究会大阪支部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 趙哲済
2. 発表標題 大川の変遷の中から中世の地形を読む
3. 学会等名 大阪市博物館機構博学連携講座「中世渡辺と渡辺党 - 淀川をめぐる武士団と信仰 - 」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉本厚典
2. 発表標題 古墳時代から奈良時代にかけての上町台地北部の金属器生産資料
3. 学会等名 鑄造遺跡研究会2019年度大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 南秀雄・趙哲済・杉本厚典・小山田宏一・大庭重信・中条武司・角哲也・別所秀高	4. 発行年 2023年
2. 出版社 (一財)大阪市文化財協会	5. 総ページ数 156
3. 書名 大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究	

1. 著者名 杉本厚典	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大阪歴史博物館	5. 総ページ数 123
3. 書名 特別展展示ガイドブック 難波をうたう - 万葉集と考古学	

1. 著者名 南秀雄「日本列島における5～7世紀の都市化」	4. 発行年 2020年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 882
3. 書名 中尾芳治編『難波宮と古代都城』	

1. 著者名 杉本厚典「近世から近代の酒造業とその関連産業について」	4. 発行年 2020年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 882
3. 書名 中尾芳治編『難波宮と古代都城』	

1. 著者名 南秀雄「上町台地の都市化と難波屯倉」	4. 発行年 2020年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 344
3. 書名 大阪市立大学難波宮研究会編『難波宮と大化改新』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	趙 哲済 (Cho Chuljae) (20344369)	一般財団法人大阪市文化財協会・学芸部門・学芸員  (84413)	
研究分担者	杉本 厚典 (Sugimoto Atsunori) (70344364)	地方独立行政法人大阪市博物館機構（大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪・大阪歴史博物館・主任学芸員  (84433)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------